



情報誌

FAR

34 号

事務局：公益社団法人 日本放射線技術学会事務局内

〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入東鋸屋町 167 ビューフォート五条烏丸 3F

TEL:075-354-8989. FAX:075-352-2556/http://www.jsrt.or.jp. Email:office@jsrt.or.jp

《ごあいさつ》

お元気ですか ～箱根でお逢いしましょう～

副会長 川上 壽昭



情報誌 34 号が皆様のお手元に届く頃には、きっと爽やかな季節となっていることと思いますが、今、こうして巻頭のご挨拶を書いている窓の外は真夏の太陽が容赦なく照りつけ気温は 35 度を超えています。特に今年の夏は福島原発の影響による節電と異常気象がもたらす猛暑が重なり、体力の低下した高齢者や、糖尿病など慢性疾患のある人は熱中症対策が急務で、その対策が呼びかけられていますが、会員の皆様方には厳しかったこの夏を無事に乗り切られましたでしょうか。案じております。

さて、「Medical Science の一員としての心柱 s を求めて」をメインテーマとして第 40 回秋季学術大会が 10 月 4 日（木）～6 日（土）の 3 日間 タワーホール船堀において開催されます。本学会の秋季学術大会が東京で開催されますことは、私の記憶になく、おそらくはじめての開催ではなかろうかと思っています。それだけに、今秋季学術大会を楽しみにしているところであります。保科正夫大会長はこの大会にかける意気込を次のように述べられています。

Medical Science の進歩は臨床を豊かなものにしてまいりました。しかし、神髄は不変であり、それは病にある者を救うことであります。あの巨大タワーは歪んだプレートが放出したエネルギーに耐え、ひととき高く聳えております。その地下には地中壁杭が、そしてタワーの中心には心柱が貫かれています。我々は Medical Science の一員として各分野ごとに心柱を増強し、心柱 s としてそれらを終結させ、ゆるぎない放射線技術を構築しなければなりません。

「会員の親睦を図ることを旨とし、併せて JSRT の発展を支援する」ことを心柱として平成 13 年 4 月 5 日に神戸で発足した我々の FAR 会も昨年には区切りとなる 10 年が過ぎ、今後の発展と継続が望まれてきているところであります。

云うまでもなく、FAR 会の大きな楽しみは、その土地名勝・旧跡を巡り、歴史とロマンを味わい夜は温泉につかって疲れを癒し、地元の酒と肴に舌鼓を打ち夜の深けるのも忘れて、懐かしい仲間と夜の深けるまで当時を振り返りながら話に華を咲かせることにあります。

今年は「2012 箱根を巡る旅」として、美しい風景、癒しの空間、楽しい時間、歴史を振り返る時間、大自然に囲まれた日本を代表する観光地「箱根巡り」が計画されております。緑豊かな箱根の山々を眺めて、癒しの湯に身をくつろげながら、盃を傾けて新たな出発を飾りましょう。

元気にお逢いできますことを楽しみにしております。

内 容

- | | |
|----------------------|----------|
| 1. ごあいさつ | 副会長 川上壽昭 |
| 2. 2012 箱根を巡る旅 | |
| 3. 会員動向 | |
| 4. 会員の広場 | |
| 5. 特集「絆—再考」 | |
| 1) 血縁の絆 | 神澤良明 |
| 2) 家族の絆 | 清水久子 |
| 3) 放射線安全管理教育に携わって | 前越 久 |
| 6. 会員投稿 | |
| 私の NGO 活動 | 金尾啓右 |
| 7. JSRT 情報 | |
| 8. 第 35 号の特集原稿募集 | 梁川 功 |
| 9. 連載《ご当地自慢》『富山の鱒ずし』 | 倉西 誠 |
| 10. 編集後記 | 森 克彦 |

《2012 秋の FAR 会》

「2012 箱根を巡る旅」へのお誘い（最終案内）

第 40 回秋季学術大会が久し振りに東京都内で開催されることになりました。それに関連した今回の旅は“箱根の山は天下の陰”と唄われたのも今は昔、正月恒例の“東京－箱根間往復駅伝”で有名な「箱根を巡る旅」と致しました。

観光バスの運転手が“箱根は、山あり、谷あり、湖あり、そして富士を眺めながら温泉に浸り、山海の珍味を味わいながら盃を交わす観光地で、もっともっと自慢しても良い処ですよ”と言われ、成程な。と思った次第です。

箱根は四季折々に違った顔を見せてくれますが、秋は「仙石原のすすき」が有名です。FAR 会の皆さんには、湯本温泉(ホテルおかだ)で「源泉とお酒を」嗜みながら、一夜を語り明かせて頂ければと願って居ります。なお、配偶者の同伴は会員扱いとして歓迎いたします。別室ご希望の方は部屋確保の都合上、早めにお知らせください。

記

開催日：平成 24 年 10 月 6 日（土）～7 日（日） 1 泊 2 日

集合地：タワーホール船堀 正面玄関 13:15 （出発 13:30）

宿泊先：箱根湯本温泉「ホテルおかだ」<http://www.hotel-okada.co.jp>

〒250-0312 神奈川県足柄下郡箱根町湯本茶屋 191 Tel 0460-85-6000

観 光：箱根遊覧（大涌谷、箱根神社など）

参加費：会員 25,000 円＋5,000 円（会より助成）：非会員 30,000 円

行 程：6 日(土) タワーホール船堀 13:30 マイクロバス発

→ 湯本「ホテルおかだ」会食 宿泊

7 日(日)「ホテルおかだ」→ バスで箱根遊覧（大涌谷、箱根神社など）

→ 昼食（箱根湖畔荘）→ バスで小田原駅へ（15:00 解散予定）

世話人：山田和美(代表)、四宮恵次、伊藤敏夫

※ まだ人数に余裕があります、お申し込みは事務局へ電話又はメールでどうぞ。

~~~~~

#### 《会員動向》

- ・会員数(平成 24 年 7 月 27 日現在)：98 名
- ・新入会者：1 名 宮崎 茂(2012/6/29 入会)
- ・退会者：1 名 山下 緑(2012/6/20 付け 自己退会)

#### 《会員の広場》

運営・総務合同委員会報告

「平成 24 年度第 1 回運営・総務合同委員会」

(平成 24 年 7 月 29 日、JSRT 事務局にて開催、山田勝彦副会長 以下 6 名出席)

議題および承認事項

①規約の一部改訂(案)ならびに運営に関する細則(1) 具体的事項の改訂(案)を検討し、第 2 回役員会議に提案する事とした。

②「2012 箱根への旅」最終企画を確認し、開催案内及び参加申込用葉書を全会員に郵送する。

③「2013 懇親の夕べ」企画素案の検討

④情報誌関係（各号の原稿締切日、発行予定日を以下の通りとする。）

・第 34 号：原稿締切日 2012 年 8 月 15 日、発行予定日 2012 年 9 月 15 日

・第 35 号：原稿締切日 2012 年 12 月 15 日、発行予定日 2013 年 1 月 15 日

・第 36 号：原稿締切日 2013 年 4 月 15 日、発行予定日 2013 年 5 月 15 日

⑤会議開催予定

・平成 24 年度 第 2 回役員会議

- 日時：平成 24 年(2012 年)10 月 6 日(土)場所：タワーホール船橋
- ・平成 24 年度 第 2 回運営・総務合同委員会
- 日時：平成 25 年(2013 年)1 月 11 日(金) 予定 場所：JSRT 事務局
- ・平成 25 年度 第 1 回役員会議
- 日時：平成 25 年(2013 年)4 月 場所：パシフィコ横浜会議センター

## 《特 集》

### 「絆—再考」

第 34 号特集テーマは、「絆—再考」としました。

東北震災後、家族の大切さ、地域のつながりなど見直されるようになったと思います。今回のロンドンオリンピックにおいて活躍された選手の皆様が、「応援に後押しされて頑張ることができた」と話されているのが印象的でした。このように、生きていく上で絆が非常に重要であるという認識を新たにすることができるようになったことをうれしく思うことです。

今回、お願いした先生方も家族の絆、大学での絆を綴っていただきました。皆様も絆について思いをはせて頂ければと思います。

特集企画 富吉 司

### 血縁の絆

三木市 神澤 良明



#### 【おねだりの孫】

昭和 49 年生まれの長男を筆頭に私には 4 人の息子がいる。それぞれ 37、35、34、32 歳である。長男には男児と女児が授かり、私も「お爺ちゃん」と呼ばれるようになってしまった。

孫がやって来る時、必ず言う言葉がある。「お爺ちゃん、ジャスコに行こう」である。近所にスーパーマーケットがあり、そこに行きたいと言うのである。



「僕、ゲームをするんだ！」と言ってゲームコーナーに連れて行かれる。ゲームが終わると私の手を取って「僕、玩具が見たいんだ！見るだけだよ」と。玩具コーナーに行く。あらかじめ目を付けていた玩具の前に飛んで行き、「僕、前からこれが欲しかったんだ。でも今日は見るだけだから！」と言う。「もう、帰ろうか！」と言っても、孫は一向に帰ろうとはしない。「これを買ったら、お母さんに怒られるよ」と私が言っても、「謝るから！」、「もうこれで終わりにするから」と言っても帰る気配がない。結局、可哀想に思っ買ってしまふ。孫のうれしそうな笑顔に負けてしまふ。お誕生日やクリスマスのプレゼントに買ってもらうような玩具をねだってくる。母親に「お爺ちゃんに、何でも買ってもらったらいけない」と言われているようだがあまり効き目がないようで、孫は何かおねだりがある時だけやって来るように思える。人にその話をする、「孫はそんなものだ」と言う返事が返ってくる。これがお爺ちゃんと孫の絆でしょうか。

#### 【お金もないのに結婚した息子】

3 月末に 3 男が結婚した。相手の女性とはお付き合いしているのは知っていたが結婚することは知らなかった。私たちに知らせる前に相手のご両親に許しを得ようとお会いしたようだ。私たち夫婦には何も話さないで行っていたのだ。私たち両親に話をしていないことを聞いた相手側のお父さんが「ご両親に話しをして、出直しなさい」と言って下さった。再度、お伺いして、了承してもらったことを伝え、婚約が整ったようだ。

家に帰った息子は「結納が要る」と言うだけで、金額のこと、結納飾



りのことも何も言わない。言えなかったのだ。息子はお金を持っていないのだから、言えるはずがなかったのだ。結局、全て私どもで用意をして結婚式を迎えた。私も一銭もお金を持たず結婚させてもらった。息子のことを兎や角言える資格はなかった。これも親から子、孫へと順送りなのだと感じた。

披露宴の時に、花嫁が「私は神澤の一員になります」と言ってくれたときに、新しい絆が生まれたのだと感じた。

## 家族の絆

京都市 清水 久子



数年前、近所に 5 歳、3 歳（女の子）1 歳を満たない（男の子）のご家族が引っ越して来ました。

ある日、女の子が寄り添ってきて話しかけてきたのがきっかけに子供達やご両親と親しくなり、次第に我が家にも遊びに来るようになりました。

そして、本当のおじいちゃん、おばあちゃんのように子供達と過ごす時間が増えました。

孫がいなかったので子供のひたむきで純粋な気持ちに接していると私自身、心が癒されました。

額に男の子は「大(元気に)」、女の子は「小(健康に)」と願いを込めて書きます。ちなみに京都が発祥地らしいです。

今では子供達も成長し、女の子達は小学生。男の子も今年からは幼稚園。週一度、幼稚園のバスが来るところまで手伝っています。家族ぐるみのお付き合いをさせてもらいひとつの絆ができて心強いです。

この年齢になって今年、初孫が産まれました。

お陰さまで娘が予定日より 2 週間早く 6 月に元気な男児を出産いたしました。

大きな産声を上げたそうです。大変なお産でしたので感動のあまり娘は、自然に涙が流れたそうです。本当に頑張ってくれました。

看護師さんが病室に赤ちゃんを連れて来られ初めて抱かしていただきました。

首もすわらない乳児を抱くときの感覚は柔らかく、暖かく、体重の重さ、ほのかな香り、そして、呼吸の速さに感動！生まれてきてくれてありがとう！お世話になった先生方に感謝です。10 日後に無事退院できました。

家の中が明るくなり、それぞれの分担を決めて気のついたことはお互いに話すことにしました。今までにない「家族」の雰囲気にまとまりを感じ、絆の深さを改めて意識しました。近所の孫達も出向いてきて赤ちゃんの頭をちょっと触ってお兄ちゃんぶりです。

ふっと娘の顔をみながら思い出します。

数年前に私にくれた手紙の一文に「小さい時から共働きで学校から帰ってきてもお帰りと言ってあげられなくてごめんねって今でもよく話すけれど、お母さんの一生懸命な姿を見て自分も頑張らないとって思ったよ・・・」という一文が今も私の心から消えないでおります。

娘は毎朝 6 時過ぎに出かけ通勤時間約 2 時間弱の道のりを頑張って通勤しています。出勤時間の 30 分前に入社すること、残業は出来るだけしないようにその日の内に全力で頑張るということなどをモットーとして 15 年の年月が過ぎました。今年 5 月に産休に入り、里帰りしてきました。通勤途中に体調を崩したこと「赤ちゃんがお腹にいることさえ忘れて仕事したよ」と話してくれました・・・娘の優しさ、忍耐の強さ、誰からも慕われて・・・職場での結びつきも大切にして頑張っているようで嬉しいです。

娘が出産する過程においてこんなにも不安・神経・気遣いそして頭の中が真っ白になったこと等々を経験しました。改めて親の有難さを感じました。親から子へ、子から孫へとそれぞれの立場に出会ったとき、同じ思いを感じ、絆の深さを知るのでしょうか。

忙しい毎日を過ごして感じることを忘れがちですが、この原稿の依頼を頂いて改めて絆の大切さを痛感いたしました。



## 放射線安全管理教育に携わって

名古屋市 前越 久



昭和 55 年 4 月名大医療技術短期大学部診療放射線技術学科が発足した時、放医研の養成訓練部から河野宗治先生が教授として赴任してこられ、放射線計測学の講義のかたわら放射線取扱主任者として学生の教育訓練と医短の放射線施設管理に当たられていた。私は助教として先生にいろいろと教わり放射線安全管理については駆け出しの頃であった。昭和 58 年 3 月末、先生は医短の第 1 回生を送り出した時点で定年退職され、放射線取扱主任者は私が引き継ぐこととなった。その後、医学部保健学科を定年退職するまで 17 年間放射線取扱主任者を務めた。この間、放射線事故を起すこともなく無事職務を果たすことができた（と思っている）。それは、平成 21 年に文部科学大臣から放射線安全管理功労者として認定されたからそう思っている次第。当時は、例えばラジオアイソトープ（RI）廃液貯留槽から少しでも漏水事故が発生したりすると、新聞にでかでかと報道され、科学技術庁の係官の立ち入り検査があり大騒動になったものである。RI 実験室で使用した放射性廃棄物は、サーベイメーターで放射能汚染が検出不能と思われる程度のものでも、RI 実験室から発生した可燃物、不燃物などの個体廃棄物は放射能マークがついた黄色の 50 ㍑ドラム缶に入れて有料（当時は可燃物 1 本 2 万円位であったが現在は¥32,100 である）で廃棄業者に引き渡さなければならなかった。ところが一昨年の 3. 11. 突然襲ってきた地震・津波による福島の大東原発電事故があつてから、東北地方の民家、庭先、田畑、野山など至る所で放射能汚染が起こってしまった。この時を契機に、マイクロシーベルトあるいはミリシーベルトとか、ベクレルという単位が新聞紙上を賑わせ、個人被ばく線量計を小学生が着用するようになったり、サーベイメーターやアラームメーターで居住区域をサーベイしたり、ゲルマニウム半導体検出器で肉、魚、野菜などの食品中の放射能測定をする知識など、一般市民の間でも詳しい内容はともかく日常会話でも平気で放射線専門用語が使われるようになった。これは驚くべき事態である。1986 年、旧ソ連ウクライナの北にあるチェルノブイリ原子力発電所が空前の大爆発を起こし、ロシア各地はもとよりヨーロッパにも放射線能汚染が広がり原発史上最悪の大惨事となったのは 26 年前のことである。日本ではチェルノブイリのような事故はまず起こらないであろうと正直のところ思っていた。ところが原発事故の深刻度を示す国際評価尺度が最悪の「レベル 7」というチェルノブイリと同等の危険レベルの事故になってしまった。

私が現職の頃、放射線安全管理教育の一環として夏休みを利用して浜岡原子力発電所の見学に毎年 10 名ほどの学生を連れて見学に行ったものである。いつ頃から始めたかは定かではないが、10 年以上続けたとしても 100 名以上の学生を引率したことになる。

放射線管理区域への出入りに関する注意事項や、ホールボディカウンターにより学生の体内の  $^{40}\text{K}$  を測定したり、浜岡原発周辺で採取した野菜、魚に含まれる放射性物質の測定など、体験することができました。また、原子力館では直径 70~80mm 程度の太い鉄筋コンクリートで発電所の建屋が構築されており少しぐらいの地震で崩壊することはないといった説明付き展示物を見学したりしていたことを思い出している。

しかし、このたびの福島第 1 原発の現状はどうかというと、水素爆発が次々発生し、見るも無残な姿をさらけ出してしまったのではないかと改めて認識の甘さを見せつけられた思いであった。これでは、地震ばかりでなくテロ攻撃があつても同じ状況が発生すること間違いないと恐怖感さえ覚えるばかりである。学生たちには原子力発電所は安全であり、中で働いている所員たちの放射線管理はもとより周辺の放射線管理もきめ細かく行われているとの認識でこの見学会を毎年行っていたのであるが、当時の学生たちは今どう感じているのだろうか？想定外では済まされないような現状をふまえ、かつての学生たちとの絆と教育者としての反省を重く感じているところである。



浜岡原子力発電所内の原子力館前にて学生たちと記念撮影  
(右端が筆者)

《会員投稿》

私の NGO 活動

金尾 啓右



はじめに：

私は、住友病院を 65 歳で定年退職し、退職後の 6 年間を、国際医療援助機関「プロジェクト・ホープ・ジャパン；PHJ」に在籍し、主にパプアニューギニアの医療援助を行いました。

支援のための募金活動に際しましては、日本放射線技術学会の多くの先生方からも多大なる義援金を頂戴しました。大変遅くなりましたが、御支援下さった先生方への御礼を兼ねて支援活動の一端をここに紹介・報告させていただきます。

活動の概要：

パプアニューギニア奥地における私の支援作業は、日本国内での募金活動、医療支援の器具機材、試薬等の調達などのほか、日本からパプアニューギニア奥地アイタペまでの、すべての通関業務、奥地への搬送、開梱、設備作業等々のすべてでありました。また、郵便局の利子による資金援助で、現地の女性技師ジョイスさんを、滋賀医科大学放射線科に招待し、一か月にわたって撮影技術を研修・習得させました。また、3 回目の奥地訪問の前後には、首都ポートモレスビーの日本大使館を訪問して、現地への支援を要請し、後日 1,000 万円の「草の根」資金援助を現地診療所に頂くことになりました。

一次派遣：地震後の大津波被害緊急支援 1 週間

二次派遣：医療器材持参で診療所の検査室立ち上げ 1 ヶ月

三次派遣：水道全面改修支援 1 週間

ほかに：女性技師の国内研修支援（滋賀医科大学） 1 ヶ月

1) 第一回パプアニューギニア大津波緊急支援 1998. 7. 25. ～8. 2

地震の概要：1998 年 7 月 7 日、いわゆる花の木曜日の夕方、海岸線には多くの若者が集い、週末を楽しんでいた。18 時 40 分頃、マグニチュード 7.0 の地震がパプアニューギニア北西部海岸沖 35 キロ付近で発生したのであった。地震発生数分後から 10 分後にかけて、高さ最大 15m の大津波が 3 波にわたり沿岸部を襲った。死者 2182 名、重軽症者 473 名、被災生存者 9199 名（国際赤十字発表）であった。

支援活動：1998 年 7 月 22 日（水）米国核医学技師会長キャシー・トーマスさんの送迎会を、越智宏暢先生を交えた約 10 人の技師仲間とともに難波の飲み屋で開催。午前 2 時頃帰宅したところ、事務局長の S 氏から「パプアニューギニアで大津波が発生し多くの犠牲者が出ているので AMDA と共同で緊急支援に行ってほしい」との緊急の電話連絡があった。

行動：翌日早々に準備し、翌々日には東京の事務所に出頭。そこで寄贈品のコニカの自動現像器、発電機、ポータブルレントゲン撮影装置、現像液・定着液、フィルム 500 枚分などを受け取り、必要な小物類は近所のスーパーで買い揃え、7 月 24 日（金）夜には羽田空港から飛び立った。今回はオーストラリアのブリスベンを経由し、折り返して北上、首都ポートモレスビー着（7 月 25 日早朝）、一泊ののち国内線で西端の町ウエワクに飛んだ。

ポートモレスビー出発直前に機内放送で呼び出され、自動現像器が大きすぎて機内に入らないので外側の梱包をはずしたい、というので OK した。午前中にウエワク着。ウエワクから、更に僻地アイタペまでの便を待ったが、なかなか来ず、結局オーストラリア空軍の好意で軍用貨物機に便乗させてもらい現地アイタペに到着した。この村では至る所に銃を構えた民兵がおり、緊急事態による治安の物々しさが肌身に感じ取られた。

私たち一行、とは言っても日本人は若い外科医 Y さんと私の二人のみ。数人の現地人と一緒に直ちに被災現地マロル村に赴いた。救急車でがたがたの石ころの山道を走り、峠を越えて約 1 時間。到着した海岸現場（勿論津波災害の現場）には水道設備、暗室用小部屋、電気設備など一切あるはずがなく、当初から私の予想通りの結果となった。村人の診療はするものの、レントゲン機材はすべて開梱することなく持ち帰った。宿泊はアイタペ診

療所から徒歩 10 分のところにある司祭さんの居宅「センジョン・オブ・ゴッドブラザー」内の一室を提供された。Y 医師にはレントゲン装置の受け入れ先を早く決めてもらうように依頼した。すぐに、救急病院のライフ診療所が熱望したので、ここに寄贈することに決めた。

7.28 (火) 統括官兼総看護婦長シスター・レナに面会し、所内を案内してもらったが、医療具らしきものはすべて古びて錆ついており、全く使い物にならない。シスター・レナから、涙ながらに医療器材の提供をお願いされた。

この診療所は、経済破綻によって職員への給与が全く支払われず、閉鎖した翌日、この大地震と大津波が発生し、大勢のけが人が、閉鎖されたばかりのこの診療所に大挙押しかけたため再開を余儀なくされた、といういわく付きの診療所であった。

早速この診療所にレントゲン機材等の搬入を行い、開梱ののち発電機のテスト、暗室の整備、水道水（泥水同然）は持参のガーゼを蛇口に括り付けてろ過して使用した。レントゲン装置は、発電機の出力を 100 ボルト用に落としてとりあえず撮影を可能とした。現地の電圧は 240 ボルトなのでトランスが必要で、後日日本から送ることとした。

帰国前夜の夕食会では、現地の人々が、帰国する数人の日本人のために特別のデザートとしてバナナを提供してくれた。日本政府派遣の T 君が、後日参加の日本人医師や看護師さんに、外国援助団体との団欒の輪に入ってほしいと依頼したのだが、彼らは全員が断ってしまった。それで私が外国援助団の話の輪に加わって歓談した。ここに応援に来ている日本人は、心ある対応の仕方ができていないと思った。

私にとって今回の活動は苦渋のものだった。日本との通信途絶、度重なる停電、政情不安定、現地生活の不安、言葉の不自由、任務の遂行未遂の不安などなどに加えて、Y さん以外のグループ医師との想定外の不協和音など。NGO 連携活動にすっかり嫌気がさしてしまった。この時妻からのファクスがやっと届き、真っ黒に焦げたファクス用紙の中に、見慣れた彼女の文字での激励の言葉を見たとき、なんと、涙がこのきたない紙の上にぽたぽたと落ちて私自身を驚かせた。

ここで私は奮い立って今回のストレスについて猛省し、名誉挽回の気持ちを強くして帰国したのであった。「カレーライスを食べたい」と妻に言ったところ、「あなた、とんでもない。和歌山で昨日、毒入りのカレーライス食べて大勢の人が亡くなったのよ」と。こういうことで、これは記憶に生々しい。

## 2) 第 2 回目支援 1999. 4. 15～5. 13

第 1 回支援の際の不甲斐なさを猛省するとともに、次の支援活動に移った。日本国内で募金活動、これには、日本放射線技術学会、日本核医学技術学会などを通じて培ってきた人脈が大きく役立った。大勢の方々が快く募金に応じて下さった。やがて、医療機器の調査発注、購入などの作業にとりかかった。ここでは住友病院の検査技師仲間があらゆる情報、知識、技能を私に提供してくれた。約 50 個の医療器材の梱包、通関発送。そして、数日後ポートモレスビー空港に到着すると、国内便に乗り継ぎの合間に、先着していた救援医療器材の通関手続きを一人ですべて行い、資材はウエワクに転送。ウエワクからアイタペへは小型飛行機で数回に亘って繰り返し空輸した。アイタペ診療所にて開梱、整備、検査室立ち上げ等々を現地技師（私の護衛兼務）と共に行った。この一か月の滞在で、現地の歴史、実情などを詳細に知ることができた。

第二次世界大戦では、15 万人の日本兵がこの国に駐屯したが、連合軍との死闘を繰り返した。その結果、戦争終結後帰国できた兵士は、わずかに 1 万人であったと言われている。このアイタペには 3 万人の日本兵が駐屯していた。彼らは現地人の目の前で何人も何人も死んでいった、と当時は子供だった彼らが話してくれた。ほとんどがマラリアと栄養失調であったという。

ウエワク在住の川畑さんによれば、ウエワクは相当の激戦地だったようで、郊外の記念碑にも案内をして頂き、在りし日の日本軍の戦況に思いを馳せたのだった。「ゲゲゲの鬼太郎」の著者水木しげるさんが戦闘負傷されたのもこのアイタペであった。

終戦後、日本兵はラバウルに集められ、日本に協力した現地人もここで裁判された。私の滞在中に食事の世話をしてくれた一老人は、彼の父も有罪判決を受け、自分の目前で処刑されたと語った。それにも拘わらず現地人たちは親日家である。なぜか。主権国家であるオーストラリアのパプアニューギニア国民に対する締め付けが非常に厳しい現実がある。産業、郵政等々は殆どがオーストラリア本土で行われ、国内に産業がない。そのため国

民所得が非常に低く、貧しい生活が続いている。だから逆にオーストラリアに反感を持つ人が多く、反対に日本に知的支援を求める機会が増幅されている。総婦長格のシスター・レナさんも親日家であり、日本語も少し話す。私は日本語をお父さんから習った、と彼女は言っていた。

ほぼ一ヵ月の作業を終えて帰国の日が近づいたある日、職員の皆さんが私を野外パーティーに招待してくれた。2台のトラックに山なりの人間を乗せて走ること30分、川のほとりでバーベキューだ。来賓の私に真っ先にボウルに入れた料理が手渡された。ゆっくり食べていて、ふと気がつくと、全員が、私の食事が終わるのを待っているではないか。来賓を大切にもてなす姿勢に感動して、すぐに皆さんも食事をして下さい、と言った。

今回は、十分な検査室立ち上げ作業を、自分のペースで進めることができた。

また、アイタペへの往復の途次、ポートモレスビーの日本大使館を訪問し、書記官に面会を求めた。その方は海上自衛隊のパイロットであったが、私のおじが航空母艦「蒼龍」の砲術長だったと話すと、すぐに意気投合して、話が非常に円滑に推移した。現地に草の根資金の援助をお願いして帰国した。

### 3) ジョイス技師の国内研修支援

郵便局の利子を利用した草の根事業に応募した。アイタペ診療所の女性技師ジョイスさんを、滋賀医科大学病院で撮影研修させる事業を計画し、渡航、研修先の準備などを、すべてひとりで実行した。

実際には、滋賀医大の放射線科技師長（のち副院長）増田忠孝先生にお願いして一ヶ月間の国内研修を同大学で行った。しかし出国時、アイタペの神父さんが、親切にも（お節介にも？）ポートモレスビーの日本大使館から彼女のパスポートと航空券を受け取り、彼女に手渡すはずだったのが、アイタペの空港で出発直前の彼女と出会い、すれ違ったにもかかわらずパスポートを手渡さなかったため、彼女は出国できず一週間ポートモレスビーで足止めという笑えない話もあった。滋賀医大で研修中の彼女は「お好み焼き」が大好きで、いつも「オコノメヤキ」「オコノメヤキ」と叫んでいた。帰国直前の彼女が、相当な体重増加になっていたのはお好み焼きが原因である。また、研修期間中に大阪や京都などにも案内し、私の支援者でもある多数の技師仲間と歓談した。東京への観光旅行にも行った。早朝、茅場町の地下鉄駅の出入り口から、蟻が湧き出るように勤労者が出てくる有様を見た彼女は慄然としてその場に立ち竦んだのであった。

郵便局の利子による国際支援は20万円ほど頂いたが、来日が遅れた分はお詫びとともに返金した。

お別れの夜、「しゃぶしゃぶ」を御馳走しようとしたが、彼女は「猫舌」で、熱い料理は全く受け付けなかった。私は二人前的高级しゃぶしゃぶを食べた。

### 4) 第3回目支援 2003. 1. 6～1. 13

2002年末に、ポートモレスビー日本大使館から電話連絡があり、草の根資金申請書を至急作成して送るようにとのことであった。文書作成に際しては現地の写真、見積書、申請書、申請者のサインなどすべてが英文である。これらの用件を兼ねて3回目の現地訪問となった。このころにはPET施設の立ち上げが控えているため、私としては心ひそかに最終の訪問と決めていた。正月明けてすぐに7日間の予定で旅立った。

ポートモレスビー空港から定刻に飛び立ち、ウエワクに到着したところが、目的とするアイタペ空港は連日の大雨で冠水して使用不能。大急ぎで航空券をキャンセルし、国内循環の航空機に変更した。この小型機は機長、副操縦士のほか乗客は3人であった。私と、あとの二人はオーストラリア人で友人同志だった。アイタペ郊外の小さな空港に降り立ったが、そこには誰一人知る人はいなかった。さいわい、一人の男性医師が、診療所から来ていたので、その車に乗せてもらって現地に到着。すぐに打ち合わせの作業に取り掛かった。この時も若干の医療資材を持参していたが、この大部分は豊中市で内科・皮膚科を開業されている長野拓三先生から寄せられた寄贈品であった。帰国時もこの小さな空港から帰った。草の蔭からヌッと姿を現したのは、19人乗りの小型プロペラ機であった。二つほどの空港を循環してからウエワクに到着する。最初に到着したのは、高山の空港で、おおよそ200人ほどの現地人が、全員上半身裸、裸足、やせた体の老いも若きも、また小さな子供達までが、ぎっしりと黒山のように飛行機の周りに集まってきていた。カメラを向けようとしたのだが、とても向ける勇気がなくて、やめにした。次の空港は、これも高山の頂上であった。着陸時には山上に向かって着陸した。ブレーキをかける必要もなく簡単に着地。その空港で一人の現地人から「ミスターカナオ！」と声をかけられた。驚いて彼を見ると、数か月前に神戸の教会で神父さんに付いてきた助手の現地人神父さんであった。これには驚いた。まさか、こんな電気も電話もない高山のてっぺんで会うなんて。彼は、ふもとの居宅を6時に出て、この山のと



っぺんに 11 時頃到着したという。しばしの会話ののち別れた。離陸は谷間に向かって突っ込む。飛行機は、深い奈落の谷底に向かってまっしぐらに、まるで木の葉のように落ちていく。スリルのうちにウエワクに到着。ポートモレスビー空港で、やっと帰国の便に間に合った。

自作の英文申請書をポートモレスビーの日本大使館に提出した。まもなく大使館から電話連絡があり、資金の認可が下りて近日中に現地に送金するとのことであった。

まもなく、私は脳梗塞の診断書を添えた退職届を三鷹市の PHJ 本部に郵送し、退職した。この辺が潮時と考えた。なにしろ、PET 施設の立ち上げも忙しくなっていた。

(第 3 回目支援) 2003. 1. 13. 現地から日本へのファクス

プロジェクト・ホープ・ジャパン

S 様、K 様

大変厳しい交通条件、連絡手段でした。前便のとおり空路アイタペに着いてみると、ここは全く隔絶された陸の孤島です。空港の水害により飛行機を変更したため次週の便が月曜日（今日）となり、これを逃すと次は金曜日ですから帰国便に間に合いません。おまけにリコンファーム（確認）の取りようがなく係員が行方不明。今日乗れたのが幸福の絶頂でした。19 人乗りの小型機で木の葉のようにジャングルの上空を飛び、二つの集落を経て正午にやっとウエワクに着き、命拾いの様な気持ちです。

かくして短いアイタペでの滞在期間（金曜日正午～月曜日早朝）という 3 泊 4 日しかも金曜日午後と土曜日午前の間に医療資材等の開梱チェック、贈呈式、水道設備資金申請書類作成準備のための写真撮影など精力的に行動しました。

日曜日の夜は、水道改修プロジェクトの発会式と銘打って、また先方さんからの私に対する歓送会を利用してのパーティーを開催。費用は全額こちら持ち（と言っても総額 5,000 円ほど）でした。こちらの首脳陣が全員参加で大成功でありました。但し、途中でフィルム切れ、ロクな写真はありません。

本日、病院事務長パイス・ボビー氏をお連れしてウエワクまで戻り、ホテル支配人川畑氏、ライフ先生、それに私の 4 人で、病院水道設備改修申請経過とその実施を話し合い、大筋が決まりました。

詳細については明日さらに煮詰めるということにしております。今回の目的はまあ口はばった言い方ですが 90% 程度達成したように思います。ウエワク滞在中に諸作業。ポートモレスビーで外務省、JICA を訪問して予定通り帰国の目途が立ちました。自宅に転送願います。

~~~~~

《JSRT 情報》

1) 『第 40 回秋季学術大会』

大会テーマ「Medical Science の一員としての心柱 s を求めて！」

大会長：保科 正夫（群馬県立県民健康科学大学）

会 期 平成 24 年 10 月 4 日（木）～6 日（土）

会 場：タワーホール船堀（東京都江戸川区）

2) 『第 69 回総会学術大会』

大会テーマ「Creation, Innovation, and Globalization-

知の創造、技の革新、そして世界へー」

大会長：杜下 淳次（九州大学大学院）

会 期 平成 25 年 4 月 11 日（木）～14 日（日）、

会 場：パシフィコ横浜会議センター他

~~~~~

## 《原稿・作品募集》

【第 35 号特集テーマに対する原稿募集】（1 月 15 日発行予定）

■□■□■□「ありがとうという感謝の心」□■□■□

昨年、東日本大震災の際には、多くの皆様より様々なご支援をいただきまして、誠にありがとうございました。

心より感謝申し上げます。

時に人は互いに助け合い、日々支え合って生活していることを忘れがちです。これまでの日々の当たり前の生活を振り返り、支えられている家族に、友人にそして周りの方々に、素直なありがたいという感謝の心を綴っていただければと思います。

企画担当 梁川 功

## 記

原稿内容：副題（ご自由な題をお付けください。）

原稿文字数：800～1200字（400字原稿用紙で2～3枚程度）

写真：先生の写真（半身）及び内容に関わる写真を原稿に添えてお送りください。

写真はカラープリントまたは電子データいずれでも構いません。

原稿形式：手書き、ワープロ印字、メール添付など何でも結構です。

提出期限：12月15日必着でお願いします。

送付先：梁川 功 〒981-3215 宮城県仙台市泉区北中山 2-5-18 宛

Tel 022-356-3559

## 《連載》

### ご当地自慢 『富山の鱒ずし』

富山市 倉西 誠



FAR情報誌・山田編集長よりご当地自慢のコラムに原稿を出すようにメールがありました。ジャンルの食べ物、自然などから、何を選択するか迷いました。先人諸兄が書かれている内容を見せていただくと、多くは名勝、旧跡、観光地が多いように感じました。そこで切り口を変えて食べ物でご当地自慢をさせてもらうことにしました。

富山を代表する名産の一つに「鱒ずし」があります。「鱒ずし」は全国有名駅弁のランキングで常に上位に位置しており、知らない人はおられないと自負しています。そこで、ここでは歴史、材料、作り方、食べ方を紹介して自慢したいと思います。

#### ◎歴史

江戸時代中頃、料理上手の富山藩士・吉村新八が「鮎としおきのなれずし」を三代藩主・前田利興公の食に供し、高いお褒めにあずかりました。その後、改良を加えて享保2年（1717年）に、これを八代将軍・徳川吉宗公に献上して「なかなかの絶品」と称賛され、代々藩主の将軍家への献上品となりました。その後、幕末から明治初期に「鮎のなれずし」を原型に現在の「鱒ずし」が作られたと言われています。

#### ◎材料

春を象徴する魚として富山県民に親しまれてきた魚に「桜鱒」があります。ご承知とは思いますが、「鱒」は鮭の仲間で、川に残るものはヤマメと呼ばれています。この二つは、姿形もまったく違ったものになります。海へ下った「鱒」は約1年後に生まれた川に戻って来ます。戻ってくる時期が桜の咲く頃であること、あるいは身肉の色が桜色であることから「桜鱒」と呼ばれるようになった、と言われています。地方によっては「本鱒」と呼んでいる所もあります。



岐阜県高山市を発して富山平野を潤して富山市内を貫通して日本海に注ぐ神通川じんつうかわを遡上してくる「桜鱒」を使った押し寿司を「鱒ずし」と呼んでいます。

しかし、神通川の「鱒」の漁獲量は年々減少し、明治の最盛期160トンあった年間漁獲量が平成18年（2006年）にはわずか0.5トンにまで落ち込んでしまいました。幻と化した富山県内産の「鱒」に代わって、近年では北洋産が主流となっています。

寿司の味いは魚とシャリの微妙なマッチングが作り出すものです。「美味しい米」と言えば新潟県魚沼産のコシヒカリを思い浮かべられる方も多いでしょうが、富山産のコシヒカリも魚沼産に負けぬ甘味、旨味、食感を兼



ね備えています。粘りの強いこの米は「桜鱒」に良く合い「鱒ずし」となって見事な味わいと食感を提供してくれます。

### ◎作り方

材料の主役「桜鱒と富山産シャリ」が揃ったところで「鱒ずし」を作り始めます。

○「鱒」を三枚に開き、スライスします。この切り口によって味がまったく違ったものになるため一番難しい作業とされています。

○シャリに各店秘伝の調味酢を合わせて酢飯を作ります。ここから各鱒ずし屋の伝統の味が息吹き始めます。

○「曲げわっぱ」に熊笹の葉を敷き、その上にシャリを詰めます。熊笹はそれの持つ香りと防腐・殺菌作用を利用しています。また、売葉の練り葉を入れる器だった「木製の曲げわっぱ」が明治中頃から「鱒ずし」の容器として使われるようになりました。これは木の通気性を利用し、丸い形は圧力を均等に分散させるのに優れています。このように富山の二大名産品のコラボレーションが見られます。

○シャリの余熱がとれた後、その上に鱒を隙間なく敷き詰め、それを熊笹できれいに包み込みます。

○「曲げわっぱ」に重し石で圧力をかけることで鱒の脂肪、蛋白質、アミノ酸、乳酸菌がシャリに溶け込み、発酵と同じ状態になりバランスのとれた旨味を引き出します。

○鱒ずし屋のご用達の重し石は「神通川の青石」で各店が神通川で拾ってきたそうです。一見するとただの石ですが使い込まれていくうちに、鱒の脂や酢などが染み付いて見事な黒石に変身します。黒光りする存在感はあたかも鱒屋の勲章のようでもあります。

○できあがった「鱒ずし」の美味しさを保つには一定の力で押し続けることが必要です。真竹を半円にしたもので「曲げわっぱ」を挟み、輪ゴムで留めてあります。この輪ゴムは、外す瞬間まで「押す」という重要な働きをしており、その押し加減に各店のこだわりがあります。そのため、輪ゴムの太さや長さ、強さは十人十色、架け方も二重にした8の字にしたりと使い方も鱒ずし屋によって微妙に違ってきます。

### ◎食べ方

○鱒ずし屋各々が意匠を凝らした紙袋の中身を取り出すと樽の上下に青竹を渡して、それにゴムバンドをかけて押しをしてある「曲げわっぱ」が出てきます。

○ゴムバンドを外して、青竹を取り除くと「曲げわっぱ」の全容が見えます。

○「曲げわっぱ」の蓋を取り去ると。熊笹にくるまれた寿司がビニールに包まれています。ビニールを開いて、蓋を置いてひっくり返します。

○熊笹のまま蓋の上に乗せます。歯がギザギザになったプラスチック製ナイフが付いていますので、熊笹がついたままで八つまたは六つに切り分けて食べます。

○そのまま「桜鱒」とコシヒカリ、それぞれの旨味が楽しめます。

○お醤油をちょっとつけると、醤油の塩味が甘味、旨味をさらに引き出します。

○澄まし汁と一緒に、上品な味わいがひろがります。

○日本酒のつまみとして、良い酒には良い寿司が一番、徹底した熟成の旨味同士が心地良い酔いを誘います。この時のお酒は、やはり富山の銘酒「立山」か「満寿泉」でしょう。



- 保存する時、冬は暖房、夏は冷房のある場所に置いて下さい。冷蔵庫での保存は禁物です。風味が消え去り、シャリが硬くなります。
- 「鱒ずし」をおいしく食べるための適温はおよそ 20 度とされています。30 度近い気温の場合は 1～2 時間位冷蔵庫で冷やしたり、冬は電子レンジでちょっとだけあたためたり、または熊笹ごと切って弱火で網焼きにしたりすると、さらにおいしく食することができます。
- 冷えてご飯が硬くなった場合は網などの上で軽くあぶって下さい。アルミホイルなどに包んで、表面に脂が少し浮いてきたころが食べ頃です。FAR 会の橋本会長は電子レンジで「チン」するのが良いと言われていました。

### ◎味比べ

富山の名物として人気のある「鱒ずし」、それを作る店は富山県内では 30 軒以上あると言われています。その中でも「富山ます寿し協同組合」に加盟する店だけで 14 軒もあって、それぞれの店が秘伝の作り方で自慢の味を競い合っています。駅弁の「鱒ずし」と違う味わいがあると思います。いくつかの例をお示ししますが、味わいを紙面で表現するのは不可能です。最近では地方発送も可能になっています。各店にお聞きになって、自分好みの「鱒ずし」を選んで下さい。駅弁の「源」とは違う「鱒ずし」が味わえます。

- 半生しっとりタイプ：お酢のきいた甘酸っぱい味です。…青山総本舗
- 生タイプ：上品な味わい。鱒、シャリは口の中でほどける。…今井商店
- かなり生っぽいタイプ：脂が乗っており、うす塩味です。…高田屋
- 中間タイプ：食べやすく甘くない、あっさり味です。…味の笹義
- しっかりめタイプ：酸っぱさが控えめで、ほんのり甘口です。…せきの屋

富山駅前の CiC ビルにある「いきいき KAN」では、毎週金曜日に「ます寿し作り体験（要予約）」を行っています。時間がありましたら、旅の思い出作りにチャレンジされるのも一興と思います。

富山ます寿し協同組合 <http://www.toyama-masuzushi.or.jp/index.html>

いきいき KAN <http://www.ikiikikan.or.jp/floor/school/01masu.html>

~~~~~

《編集後記》

昨年の夏は一部地域で計画停電が実施されたため今年は、全国的に節電が求められ実践している会員も多数おいでになると思いますが、熱中症には十分注意されますよう祈念しております。



小生は、前年七月中頃に花虎の尾（写真）を庭で育成して一年が経過した現在ピンクの花を咲かせております。花虎の尾の花言葉は「達成」ですので、FAR 会会員の皆様も目的を定め達成して、スマートエイジング楽しんではいかがでしょうか。

因みに、小生は毎日健康で 20 キロのウォーキングを達成して現在も継続しています。

（森 克彦 記）

FAR 情報誌 No.34（非売品）

発行日 平成 24 年 9 月 15 日
 発行者 橋本 宏
 編集委員会 山田和美（委員長）
 石井 勉 森 克彦

山田連絡先 Tel&Fax. 047-153-4559
 Email:kazumi40yamada@nifty.com